

高梁の 近代化遺産 ⑧

総門橋(成羽町)

小西純一信州大学名誉教授の研究によると、鉄筋コンクリート(RC)・ローゼ橋の嚆矢は長野県木曾町の大手橋。昭和十一年に木曾川に架けられました。設計は長野県の道路技師であった中島武。

第二次世界大戦で鋼材が不足・高騰したため、鋼橋による道路橋改良が困難になりました。そこで中島は、下路トラス橋の代わりに



やさしい曲線を描く総門橋のコンクリートアーチ。がっしりとした橋脚が無骨に思えます。

RCローゼ橋の設計を完成させ、長野県を中心に架設を始めました。小西名誉教授の調査によると、長野県内に二十八橋、神奈川県、京都府、島根県、香川県、徳島県、鹿児島県と岡山県に十三橋があり、島根県と岡山県のものが戦時中、それ以外が戦後の建設だといえます。

成羽町の総門橋は、中島が岡山県の技士に迎えられた時の作品。岡山市の玉柏と牟佐を結ぶ大原橋、建部町の八幡橋のふたつを架けた二年後に完成させましたが、八幡橋は平成元年に架け替えられました。小西名誉教授は、「総門橋は川砂を材料としながらも、優れた完成度と均衡美を見せる」と高く評価します。総門橋の桁高は約一メートル六十センチ、アーチ部分(アーチリブ)の断面高が約八十五センチ。この約二対一の比率は一九六〇年代までのRCローゼ橋に共通したプロポーションだといえます。アーチリブと桁の両面(下弦材)には帯状の凹みをつくり、コンクリート特有の平板さと重苦しさを和らげています。

初代総門橋は木の骨組みの上に土を盛った土橋でした。明治四十四年に竣工し、老朽化の進んだ昭和九年、室戸台風による水害で大きな被害を受けました。新しい橋の工事は昭和十三年に着工されましたが、第二次世界大戦の影響で昭和十九年完成。総工費約二十六万円と記録されています。上流側に歩道が設けられ、橋桁の一部に補強工事が施されている以外は全くのオリジナル。中島の技術の確かさを窺い知ることができます。竣工当時、



アーチリブと下弦材につけられた帯状の凹みがコンクリートの平板さと重苦しさを和らげます。

斬新なRCローゼ橋が成羽の人々に受け入れられたかどうかにはたいへんに興味がありますが、コンクリート護岸の向こうに広がる家並みと緑の山々を借景とした総門橋の構図にはどこか風は吹いているようです。

成羽出身の洋画家・児島虎次郎が「里の水車」を描いたのは明治三十九年。総門にまだ橋はなく、坂本や吹屋から運ばれてきた銅や弁柄は総門の舟着き場から高瀬舟で川を下りました。児島の没年は昭和四年。もし画家が総門橋を見ていたら、それはRCローゼ橋ではなく明治生まれの土橋です。画家が中島の橋を見たら、一体どう表現するでしょう。(文・吉備国際大学社会学部ビジネスコミュニケーション学科准教授・小西伸彦さん)

編集と発行(毎月15日発行)高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

再生紙を使用しています。